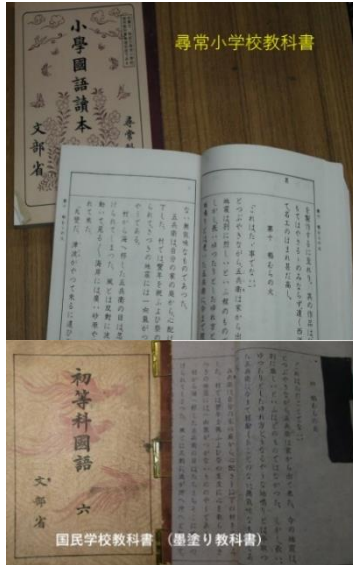


「稲むらの火」の教科書物語

「稲むらの火」が教科書に載ったのは、昭和12年から22年までの10年間、小学校5年生で勉強しました。戦前の尋常小学校と昭和16年度からの戦中戦後の国民学校の教科書に載っていました。当時は国定教科書ですから、この間の日本全国の5年生は全員が学習したのです。

よく考えてみると、「稲むらの火」という題名での掲載は確かにその通りですが、その内容を取り入れた教材は、まだまだ載っています。これまでも、その都度「やかただより」でも取り上げたと思いますが、改めてまとめてみたいと思います。



「稲むらの火」は皆様御承知のとおり、原作は小泉八雲の A Living God (生ける神)です。「稲むらの火」の題名に拘らず、小泉八雲の「生ける神」に焦点を合わせてみると、教科書との関わりが広がってきます。

1999年に刊行された府川源一郎氏が著した『「稲むらの火」の文化史』に詳しく書かれていますので、引用させていただきます。大正14年(1925)に「大正国語読本(第三修正版)巻二」に「浜口五兵衛の話」として掲載されている。昭和2年(1927)には「新編国文読本 巻二」にも載っているといえます。同じ文章は昭和7年(1932)刊行の「新編中等国語読本 巻二」にも載っているようですが、この題名は「五兵衛大明神」だといえます。「稲むらの火」が掲載されていた昭和12年よりも前に、別の題名で教科書に掲載されたということです。またこの教材は、昭和8年(1933)高等女学校用の「女子国文新読本」改訂版も含めて昭和12年まで採用されていました。

これまで言っていた「稲むらの火」が昭和12年から22年まで教科書に掲載されていました。

というだけでは、正確ではないことになります。更に、昭和22年に教科書から離れていたと思っていたのですが、昭和26年(1951)度から27年度まで学校図書発行の「国語 六年生」に「いなむらの火」が、その27年度からは「5年生の国語下」にも「いなむらの火」として掲載されていたようです。また、昭和25年(1950)度からは大修館書店の「中学国語 二年生下」には「浜口五兵衛」という題名で載っていたようで、昭和27年改訂でも、若干の字句の違いはあっても、戦前の中等学校と同じ教材が使われていたことになる。

更に、近年では平成23年(2011)度からは、いろいろな教科書に題名はそれぞれだが、「稲むらの火」を基にした教材が掲載されています。

令和3年(2021)度に滋賀県立大学を卒業された広川町出身の鳥前果穂さんが卒業論文で調査された資料に最近の教科書に掲載されている教材の一覧表がありますので、載せておきます。

【表3】「稲むらの火」に関連するものを題材とした教材(東日本大震災以降)

教科	学年	資料名	出版社	発行年
社会	小学校3・4年	地いきのはってんにつくした人々	日本文教出版	平成27年
社会	小学校5年	村人を津波から救った濱口梧陵	東京書籍	平成27年
国語	小学校5年	百年後のふるさとを守る	光村図書	平成27年 平成31年
理科	小学校6年	地震を語りつぐ	啓林館	平成27年
道徳	小学校5年	稲むらの火で命を救え	文溪堂	平成27年
道徳	小学校6年	稲むらの火	教育出版	平成28年
道徳	中学校1年	津波から村を守る一濱口梧陵	光村図書	平成26年
道徳	中学校	住民百世の安堵を守る一濱口梧陵	廣済堂あかつき	平成26年
道徳	中学校3年	「稲むらの火」余話	日本文教出版	平成27年
道徳	小学校4年	お父さんのじまん	日本文教出版	令和2年

昭和58年(1983)に起こった日本海中部地震の時に、山間部の小学生が遠足であるの海岸へ行き、津波に襲われ、10数名の子ども達が犠牲になったのでした。それで、もう一度「稲むらの火」を教科書へ載せて、津波防災等の防災教育の必要性が言われたものでした。その後、北海道奥尻島、東日本大震災等日本でも津波による大きな犠牲がありました。現在は、南海トラフの巨大地震津波も心配されています。多くの教科書によって、防災教育に取り組んで欲しいものです。

百世安堵

関西大学社会安全学部 近藤誠司

第26回 互換可能性を開く

高度情報社会が到来して、災害に関する情報も世に溢れるようになってきている。すこしネットで調べてみれば、防災・減災に役立つ便利な情報が大量に公開されている。しかし、その恩恵に浴することができる人は限られているようだ。そもそも、はなから「自分は関係がない」と思っている人の目には、端末の画面に映る幾多の災害情報さえ「見えていない」のだろう。命を脅かすリスクを御する上で有益な情報があること、それ自体の価値(ありがたさ)が伝わっていない。つまり、「情報の価値」を感得してもらうための「価値の情報」が不足しているのだ。

災害情報を“我が事”として身に引き寄せてもらうためには、人々の「互換可能性」を開くことが必要である。もし、わたしがあなただったとしたら、どんなふうにしてほしいと考えるだろう。あなたがわたしだったら、どうだろう…。

もし自分が、津波にのまれ、突然の別れを経験することになったその人だったとしたら、意識が途切れる間際に、どう感じるだろう。もし自分が、家族が津波にのまれゆくさまを、ただ茫然と眺めるしかない立場にいたとしたら、どうだろうか。必死の思いで手を差し伸べたのに、津波の威力の激しさによって、手を離してしまったとしたら、手の平にかすかに残ったぬくもりをどのように感じるだろう。自分がいま生きているのは単なる偶然であり、災害によって、あのとき命を奪われていたのは、実は自分だったかもしれない。

このようにして、立場を「互換」する「可能性」を突き詰めてみようとしてチャレンジした映画が、新海誠監督の『君の名は』であった。この作品が着想されたのは、東日本大震災の被災地、宮城県名取市閑上地区である。多くの動物種の中で人だけは、「互換可能性」を自ら開く力を持っている。次の千年紀も、まずはそこに賭けるしかない。

【館長日記】

先日、広小学校の3年生が英語の時間に作成したポスターを、「稲むらの火の館」に掲示してくれました。小学校3年生が、こうした英語のポスターを描くようになったのかと、感心しました。

そういえば、今年の「梧陵語り部ジュニア」の



発表会の時にも、英語での学習発表をした子ども達がいました。そういう時代になってきたのですね。

「世界津波の日」の制定によって、稲むらの火の館にも多くの外国からのお客様が来られていました。残念なことに、コロナ禍によって、国際交流がストップしてしまったのでした。今年の1月下旬に、久しぶりに外国からの団体さんが来館されました。南太平洋の島しょ国の大学生が19名でした。この大学生たちは、以前から訪日の計画があったのですが、コロナで来日できませんでした。館長は2年前に、この大学の学生さんに、オンラインで「稲むらの火」の話をしたのでした。その時から、コロナが収まったら来館されると言われていましたので、楽しみにしていたのが実現したのです。

英語交流もすすんできますし、コロナ禍によって、オンラインでの交流も進み、館長のような高齢者でも、こういう体験もできる時代です。

<稲むらの火の館の紹介>

濱口梧陵記念館/津波防災教育センター

〒643-0071 住所 和歌山県有田郡広川町広 671

<http://www.town.hirogawa.wakayama.jp/inamuranohi/>

*開館時間：午前10時～午後5時(受付終了4時)

*休館日：月曜日(祝日の場合は翌平日)

(世界津波の日の11月5日は開館)

年末年始(12/29～1/4)

*記念館だけの入場は無料です

*また、6月15日と11月5日は無料です